
小人の仕業

小吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小人の仕業

【Nコード】

N9747V

【作者名】

小吉

【あらすじ】

視界の端になにかが映ることがある。そこを見ても特になにもなかった場合、そこにはさきほどまで小人がいたのだ。

視界の端に、なにかが映ることがある。振り返ってみてもそこにはなにもないのだが、確かになにかが見えたのだ。それは、決して気のせいなどではない。本当にそこになにかがいたのだということ、伊賀谷太一は知っていた。

太一は、こういったことをする存在を“小人”と呼んでいた。

小人は、親指ほどの大きさで、あちこちに存在する。そして、人間が見ていないところで、些細ないたずらをするのが好きなのだ。例えば、リモコンの位置を少しずらすとか、電灯の紐をわずかに揺らすとかいったことだ。小人は人間に見つからないように移動しているが、下手なやつはときおり見つかってしまうことがある。それが視界の端に映る影の正体である。もつとも、わざと視界に入つて、姿を捉えられないようにすぐに隠れて遊ぶやつもいるのだが。

「馬鹿じゃないの？」

小人のことを妹に話したら返ってきた言葉である。高校生になつて急に化粧を覚えた晴香は、子供に似合わない化粧のにおいをまき散らし、蔑んでいることが最大限伝わるように眉をしかめさせていた。そして、半眼になり、薄笑いを浮かべながら続けた。

「だいたいおまえ、その“小人”っていうのの大きさとか、生態とか、どうやって知つたの？ 人に見つからないようにしてるんじゃないか？」

太一は、この熟年女性のような化粧をした妹がもつと幼いころにも小人の話をしたことがあった。そのとき晴香は、目を輝かせて太一の話に聞き入ったものである。その日からことあるごとに、今小人が見えた、とか、小人がいたはずらしていつてる、とか騒いでいたのだが、ある日を境に小人の“こ”の字も言わなくなってしまった。こういったことにいちいち騒がなくなっただけかと思っていたのだが、どうやらそうではなかったらしい。そして、自分が小人を信じ

ていたことも忘れてしまったようだった。

そのため、また一から小人の説明をすることにした。しかし晴香は、以前のように目を輝かせることはなく、苛立たしげに溜め息を吐いて携帯を開いた。

小人というのは、べつにいたはずしかしないわけではない。例えば、夜中宿題などに取り組んでいるときに、船を漕いでしまうことがある。これを音をたてて覚ますのも小人のやっていることだし、寝ぼけながらも問題を解こうとして、ペンが倒れないように支えてくれているのも小人のやっていることだ。一度など、問題を解いてくれていたこともあった。ただいたずらのほうが数が多いだけで、助けてくれることも確かにあるのだ。

晴香は、わざとらしく音をたてて携帯を閉じた。睨み上げ、太一が息継ぎしている隙を縫って言葉を発した。

「おまえさ」

妹が兄のことを“おまえ”と呼ぶようになったのはいつからだっただろうか。小学校まではお兄ちゃんと呼んでいた覚えがあるのだが、中学校に入ってからはその言葉を聞くことはなくなっていた。きつかけがなんだったのかは覚えていない。成長するにつれて気恥ずかしくなったための照れ隠しであると太一は思っていた。

晴香は携帯でこめかみを叩いた。そのときの表情は、おそらく一生忘れることはないだろう。

「ここ、おかしいんじゃないの。一回頭の病院行ったほうがいいよ」妹は今、太一の目の前で血を流して倒れていた。胸には包丁が深々と突き刺さっている。ぴくりとも動かず、顔は髪で隠れているため、傍から見ているだけでは生死の判別はつきづらかった。しかし、おそらく死んでいるだろう。それだけの血が床を赤く染めていた。

太一は、自分が息を荒げていることに気づいた。落ち着かせるために深く息を吸い込むと、濃い鉄錆のにおいが鼻孔を突いた。

妹が倒れているのも、包丁も、血も、なにかもが唐突に用意された仕掛けのような気がしていた。晴香が携帯でこめかみを叩き、

太一に話しかけた、そのあとの記憶がすっかり抜けてしまっているのだ。観劇の真つ最中に少しよそ見をして、目を戻したらさきほどまでやっていたものとは全く関係のない話が始まっていたような脈絡のなさを感じていた。

不意に、視界の端になにかが映った。見ると、そこには晴香の携帯があつた。血だまりに襲われかかっているところを拾い上げ、なんとはなしに外装を眺める。薄紅色の、いかにも若い女性が好みそうなものだ。裏返すと、片隅に友達と撮ったものであるうプリクラが張つてあつた。その中では、まだ生きていたころの晴香が太一へ満面の笑みを向けていた。

思わず熱くなる目頭を押さえながら、太一は携帯を開いて一一〇番を押した。妹が殺されたのだ、兄として当然のことをやらなければならぬ。

呼び出し音が途切れた瞬間、視線を感じて振り返つた。そこには、さきほどまでとなにも変わらない光景が広がっていた。しかし、ただ一つ変わっていることがあつた。晴香の顔を覆っていた髪が床に落ち、隙間から見開かれた目が覗いていたのだ。その目は、確かに太一を捉えていた。

受話口からなにかあつたかを訊ねる声が出た。太一は妹から目を離し、声に答えた。

きつと信じてはもらえないのだろう。なぜなら、これも小人の仕業なのだから。

(後書き)

小学生のころ、視界の端になにかが見えたと感じたら、そこには妖精的な小人がいたのだと思っていました。そんなことを思い出しながら書いたらこうなりました。どうしてこうなった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9747v/>

小人の仕業

2011年8月24日03時28分発行